



サイコがやってきた

Kevin Spring

あたしは屋上に立った。くそつまねえこの世とおさらばだ。終りにしようぜ、もう。ああ、ああ、あー。知ってたよ。ケリをつけない限り、かたちを変えて繰り返され続けるって。人間でいるうちは、な！

バンバンバン死ね。バン、お前も。お前も。思い知るがいいバカども。

「えーんえんえーん」

ちっ。くそうぜえやバカ。あたしにその涙は通用しねえんだよ。くそ。あんだよ、ババア。お前も使えねえな。

「ああー？」

「けんかしたらだめでしょう。どうして仲良くできないの？」

ガキだと思ってなめてんだろ、てめえ。

「なんで、こいつらと仲良くしなければいけないんですか？」

仕掛けてきたのはあのクソバカどもの方だ。

「サイコちゃん、お友達にそういう汚い言葉を使ってはいけませんよ」

くそ！くそ！くそ！

「お友達じゃないです」

「うえーんえんえん」

うるせえ。ああ、ムカつく。お前らみんな虫けらだ。こんなクソつまねえとこ、ぶっこわしてやりたい。

「謝りなさい」

なんだと？謝るのはそっちだろう？

「サイコちゃん！」

クソ！なんであたしが謝んなきゃいけないんだよ。

「いやです。あたしは悪くないです」

「ホントに困った子ねえ。お母さんに言わなくちゃいけないわね」

この薄汚れたババア、まじいらねえ。お前みたいな腐れかけの奴がいつまでも居座っているから世が滞るんだよ。人の話聞けよ、ボケ。バカはバカに慰めてもらってやさしい人ごっこやってろ、ばーか。そんなのクソくらえだ。卒園一か月前からこんなくそさみいとこ集めやがって、練習だあとか、バカだろう。他にやること思いつかねえからそんなことやってんだろ。

「サイコちゃん！足をバタバタさせてはいけません」

「ああ？」

気が付くと、バカどもも真似をして足をバタバタさせていた。こいつらしょうもねえバカ。

「みんなが真似するでしょう」

なんで最初にけんかふっかけてきた奴が怒られないで、ここで、最初にやったからという理由であたしが怒られなければいけないんだ？

「チッ」

クソババアとその手下どもがこそこそざわざわやっている。いちいち動揺すんなやもう。

「ねえねえ、さいこちゃん」

と後ろから肩を叩かれた。アキホだ。

「いまのどうやってんの？おしえてえ？」

「何？今のって？」

「ちいーっていの」

「ああ。チツ」

「すごい、とりさんみたい」

「鳥？」

アキホ、こいつまじ最強バカ。あたしはアキホの目の前に口を近づけて、

「見て。こうやって舌を上歯につけて」

「あー、アキホくとサイコちゃんらぶらぶうー」

「バーカ、舌打ちの仕方教えてやったんだよ」

「バカっていったあ。バカっていったらバカっていったひとがバカなんだよーしらないのお」

ああ？まじバカ。今お前も言ったし。

「それ、誰が言ったの？」

「せんせい、だよ」

「じゃあ、先生もバカってことだよ」

「ええー？せんせいをバカなんていっちゃいけないんだよ」

「なんで？」

お前だって本当はバカって言いたくて仕方ないからこうやって言ってんだろう？さっきから何回バカって言ってんだよこいつ。ホントくだらねえ。幼稚園なんて行かなくていいんだ。くそつまねえバカばっかなんだ。5回も転園させる親もバカだ。あの人はあたしといる時間が苦しいのか、クソ。親のくせに。だから辞めさせられてもバカみたいに入れてくれるとこ探して頭下げてんのか？

きちんとしなければいけません。人をバカと言ってはいけません。つまらなくても楽しかったと言わなければいけません。調和を常に保たねばなりません。人にはやさしくしなければいけません。場を乱してはいけません。不機嫌な顔をしてはいけません。いつも笑顔でいなければいけません。けんかをしてはいけません。友達がたくさん作りましょう。みんなと仲良くしましょう。先生は偉いです。偉い人には絶対に従わなければいけません。なぜと聞いてはいけません。人の話はちゃんと聞かなければいけません。自分を曲げてでも周りに合わせられることが成長なんです。いつまでも子供でいてはいけません。子供は子供らしくいなければいけません。子供は大人の言うことを聞かなければいけません。何事も度を越してはいけません。さもなければ、叩き潰します。目ざわりなものは全力で叩き潰してしまいましょう。分からないように、気が付かないように。なるべく早く摘み取って、なかったことにしてしまいましょう。クソ、潰されてたまるか。

「うわあー」

あの人泣いていた。あたしは家のベッドで目を覚ました。

「あれ？サイちゃんおうちに帰ってたっけ？」

「サイちゃん、お母さんうんと心配したのよ。どうして幼稚園であんなことしたの？」

「何が？」

「物を投げちゃいけないって言ったでしょ？」

「そうだっけ？」

「サイちゃん、お願いだから、もうちょっとだから我慢して」

「お母さん、お腹すいた」

「お母さんの話ちゃんと聞いて」

「やだ」

「聞きなさい」

「いやだ」

「彩子！なんで先生の言うことも、お母さんの言うことも聞けないの？そんなに困らせたいの？どうしてなの？」

だって全部あなたの聞きたいこと説明してやっても理解できないじゃん。ホント疲れる。腹減ったよ。メシよこせや。

「ごめんなさいするまで許しませんからね」

あ、そう。あなたがそのつもりならあたしも筋通させてもらうよ。

「もういい、サイちゃん寝る」

翌朝は火曜日で、幼稚園に行く日だったけど、あの人は起こしに来なかった。部屋から出ようとすると、あの人が誰かとしゃべってる声が聞こえてきた。

「つまり今日はということではなく、これからということですか？」

「待って下さい。そういう問題じゃないです。…ご迷惑おかけしたことは本当に申し訳ないと思っております。あの子どもとっても反省しておりますので、なんとか…」

あたしのことか。謝らなきゃいいのに。あんなクソみたいなバカどもに。あたし反省なんてしてねえし。

「はい、そうですか。…ですが、」

あたしはリビングに行って、テレビをつけた。

「サイコちゃん、今お母さんお話してるから音、小さくして」

あたしは、リモコンでどんどん音量を上げた。あの人がやっと電話を切ってこっちへ来た。

「サイコ！なんでお母さんの言うこと聞けないの」

「ウワーン」

なんで分かんねえんだよ。少しはわかろうとしろ、ボケが。あんたあたしの親なんだろう？聞けるわけねえだろ。ムカついて、ムカついて、はちきれそうなんだよ。あたしごと周りの奴らみんな巻き添えにしてぶっ壊れちまえばいいのに、もう。

父親のことをおやじとも言うんだと知った日、おもしれえ言葉だと思って、あの人が酒飲みながらテレビ見て笑っているときに、

「おやじ」

ってあの人に言ったら、すごい怒った顔で、

「何て言った今？」

って言うから、

「おやじ」

って、もう一回言ってやったら、あたしに近づいて来て頭叩かれた。

「二度と使うなそんな汚い言葉」

だと。くそ！くそ！くそ！くそくそくそ、バカバカバカバカくそおやじ。痛えんだよ。おもしろいって思ったのに、叩くとかありえねえし、バカ。くそ。うんこおやじ。くそ。あたしはまだこいつらからエサを毎日もらわなければ生きていけやしない。犬畜生と一緒に。くそ、それなら犬小屋で暮らしてやるよ、あたし。うちはアパートで、犬飼えなくて、だから犬小屋もないんだよ。本当に腹が立つ。毎日毎日ムカつくことばかり。あの人はいつもの疲れた顔であたしを見て、何も言わなかった。あたしは自分の部屋に戻るふりをしてそっと家を出た。確か、アキホんちには犬がいてでっかい犬小屋もあったから、そこへ行こうと思った。あんなバカなアキホでも怒らないできた親だし犬より賢い人間がもう一人増えるぐらいどうってことないだろうと思って、アキホんちに入ろうとした。だけど金持ちの家はあたしが簡単に入れる程、無防備ではない。夜だし、アキホはもう寝ているだろうし、どうしようかと考えた。

「おじょうさん、どうしたの？」

と男の人の声が聞こえた。しゃがみこんであたしの顔を見た。あたしは一見いいとこのお嬢さんのような雰囲気をしているから、誘拐されると思って、

「うちはびんぼうです」

と言って走った。でも、誘拐されてみるのもいいかもしれないと考え直した。立ち止まって振り返るとききの男の人はもういなくなっていた。仕方がない。帰るしかない。でも、歩くのめんどくさい。疲れた。あたしは無人の交番に入ってイスに座ろうとしたんだけど、高くてうまく座れなかった。クソ。あたしを床に座らせるのか、警察は。もういい、犬小屋もここも同じようなもんだ、あたしはここで寝る。

「…は、もう、いやです。お願いします、次は…」

「彩子ちゃん、帰るわよ。もう、心配したんだから」

あたしは夢を見ていた。あの人の顔を見たら泣けてきた。なんでこんなバカ選んであたしは産まれて来たんだ、と。

「ほら、お父さんも待ってるから帰ろう」

「う、うえーん。ゲフ、ゲフ」

くそ、あたしは犬よりも自由じゃない。泣きたくないのに涙が出てくる。

「ああ、安心したんだね、お母さん来てくれて」

「ちがう、ちーがーうーの一」

おまわりのバカ。適当なこと言うんじゃないや、ハゲ。迎えになんかくんじゃないやバカ。おやじのバカ。涙はだらだら流れっし、言葉通じねえし、なんか和んでて腹立つし、ムカつくし悔しいし、泣くしかねーわなーこれ。

「ギャーもう、い、や、だ。あーー」

そうだよ、次は…、の続き何だったんだよもう、いいとこで起こしやがって、どいつも、こいつも使えねえ。あたし誰に何お願いしてたんだよ。

家に帰ると、くそおやじはどでかい屁をぶっ放してあたしを迎えた。おおー、じゃねえよ。自分の屁の音量くらい予想つくだろ。誰のせいでくそ疲れる思いしたと思ってんだよ。

「サイちゃん、お風呂入ろう」

「…いい」

「お風呂入らないとぼっちいよ」

「いい、ぼっちくて、寝る」

「ダメです」

「なあんで。結構なんです」

ああ、めんどくせ。風呂大嫌い。風呂は毎日入らなければいけないって誰が決めたんだよ。ぜってーこれも誰かの刷り込みだ。すりこみクソくらえ。あたしは入ろうと思ったときに入るんだ。お前らの指図は受けねえ。

小学校三年の時、おやじの仕事の都合で引越しをすると知った。おやじもあたしと一緒に追いついて転園してるみたいなことかと思った。

「お父さんてさ、サイコみたいにハブられてんの？」

「ええ？違うよ。お父さんがそんなことされるわけないでしょう。大丈夫だよ」
な・ん・だ・と？お父さんが、そんなこと、されるわけないじゃないだと？じゃあなんであたしはそんなことされたんだよ。いなくなればいいのは、バカどもの方だろ？え？そうじゃねえのか？

「あっそう」

あの人は首をかしげていた。本当に無能な生き物だ。この人はあたしが何に傷ついているのか理解できなかったためしがない。どれだけ傷ついているかなんて想像もしていないだろう。恐ろしいまでの想像力の欠如。バカにもほどがあるってんだ。引越し当日、アキホが飼い犬に連れられてやって来た。別に呼んでもいないのに。アキホは相変わらずバカでへらへら笑ってて、犬は暑くてハアハアうるさかったし、触ったら超くさかった。あたしは車の中で手を洗えなくてずっと手が臭いままですげえ、気分悪かった。

。

夏休み明けの二学期から新しい学校に通うことになっていた。あたしは始業式の後クラスに合流した。担任はうちのおバカさんより少し若いくらいの中原ってやつだった。いかにも頭の硬そうな女でどうせこいつもバカだろうと期待はしなかった。

「S県の城南東小学校から転校してきました、森彩子さんです」

「森です。よろしくお願いします」

お約束の拍手がおこった。だけどそれは形ばかりで完全アウェーって感じだ。なんか言いたげなやつもいるし、探ってるやつがほとんどだな、この小心者どもが。

「じゃあ、森さんはとりあえず、後ろの空いている席に座って下さい。後で席替えをします」

「イエーイ」

「その前にみんなも森さんに自己紹介しましょう。名前と趣味とか好きな食べ物とか好きな物とかなんでもいいので一言いしましょう。じゃあ、阿部くんから」

「阿部俊太です。趣味はゲームで、好きな食べ物はカレーです」

あっそう。って感じ。

「安藤麻美です。趣味はピアノとバレエと英会話と体操とあと習字と公文です。よろしくお願いします」

おまえ、つめこみすぎ。趣味じゃねーしそれ。

「石井桃花です。趣味はピアノで好きな食べ物はいちごです」

こいつ、たぶん嘘つきだな。

「石井悠斗です。趣味はサッカーであと好きな食べ物はしゃぶしゃぶです」

チョイスがおやじくせーなこいつ。いちごしゃぶしゃぶってうまいのかな？肉巻きいちご夫婦って覚えとこうこいつら。あー、なげえ。全部とか覚えらんねえし。しかし、カレー好きなやつと、サッカーとピアノ多すぎ。本当かよって思うわ、どいつもこいつも。

「森さんは、趣味は何ですか？」

「いや、そういうの特にないです」

「えー、ないんだって、趣味がないんだって」

ざわざわざわざわうっせーな。趣味は罵詈雑言とでも言うか？

「じゃあ、習い事は何をやっているんですか？」

「なんもやってないですけど」

「えー？本当に？」

「はい。うそついてもしょうがないでしょ」

「うそついてもしょうがないでしょ」

でたよ、オウム野郎。困ったときのオウム返し。

「なんか、変じゃない森さんって」

「感じ悪いよね」

「えらそう」

「ちよっとかわいいからって調子こいてんだよ」

「転校生のくせに生意気じゃない」

「友達になれなさそう」

「性格悪いよね」

全部聞こえてんだよ。ひそひそザワザワザワザワ、くすくす、がさごそがさごそごそがさ…。

「うるさい、このゴキブリども」

あたしは力いっぱいこぶしを机に叩きつけて、そう叫んだ。教室は静まりかえった。な、か、は、ら。お前が早々に黙らせるべきだろう。この屑どもを。なに困ってんだよ、バーカ。

「はいはい、みんなもよくないけど、森さんも言葉づかいは気をつけましょうね」

ざっくり、まとめやがった。死ね、事なかれ主義。マジ腹立つ。

「なぜですか？」

「え？」

「みんなのどこがどのようによくないのか、私のどの言葉の使い方を、なぜ気をつけねばならないのか、教えて下さい」

「あのねえ、森さん、落ち着こう。座って」

「言えないならあたしがかわりに言いましょうか？」

「座って」

あたしは中原の顔をじっと見た。

「座りなさい」

命令クソくらえ。

「ごまかさないで、質問に答えたら座ります」

「先生、早く席替えしようよ」

「そうだそうだ」

席替え、席替え、席替え、そんなに席替えしたけりや席なんか決めなきやいいだろう。バカども。

「はい。そうだね、先生の言うことを聞けない子は放っておいてくじびきしましょう」

バカ中原、クソビッチ。死ね。幼稚園かここは。

「森さん、座る気になりましたか？」

「チッ」

まじ死ねこのクソアマ。バカ、ドブス。性悪、気に食わねえ。

「こわーい、森さん」

「森さんはあとで職員室に来なさい」

ぶっ壊してやる。くそ、くそ、くそ。くじがみんなに渡ったあとに中原が最後に残ったあたしの分のくじの紙を開けて席を指し示した。てめえ、今どんな顔したかあたしは忘れねえかな、覚えとけ、このクソ女。他のバカたちは自分で引たくじを見て、きゃあきゃあ言いながら自分の新しい席を確認していた。あたしにとってはどこでも同じだ。同じことの繰り返し。くそくだらねえ奴ら。あいつバカどもをうまく利用して逃げやがってあたしの質問に答えてねえし、本当にムカつく。ああ、ああまたムカつくことばっかしかよ。どこ行ってもバカばっか。なんであたしはこんなバカだらけの世の中に生まれてきたんだろうか。

なじむということとは全く違うが、あたしも慣れることくらいはできる。バカと適当に遊ぶこと。バカの話の流れしながら聞いてやること。くっそつまんねえ授業をやりすごすこと。まあそんなところだ。ひと通りやってみたが、たいそうつまんねえことに変わりはない。三学期も終り頃クラスであたしの次に頭がいいと言われている本橋大悟の視線をやたらと感じるようになった。きんもち悪りい、こいつ。けんか売ってんのかあたしを好きかどっちかだと思った。あたしが本橋を見ると目が合う。チッ。そらしてまだ視線を感じっからまた見る。また目が合う。

「何だよ？」

「何でもない」

そんであたしは休み時間に本読んでっと、また視線を感じる。見る。目が合う。クソ。おめえみたいなのが性犯罪者になんだよ。抑欲野郎。いい加減あたしの断りなしに見ることは我慢ならなかった。

「おい、本橋、そんなに見たけりゃここで見な」

あたしは、前の席のイスをシャープペンでこつんこつんと叩いてやった。あたしのご厚意だ。ありがたく思え。すると本橋ではなくブス女1が近付いてきた。ああ、こいつの本名なんだっけブ、ブ、ブタ？

「ちょっと森さん、大悟くんにそういう態度やめてくれる？」

「ああー？」

東になってバカ女どもがやって来た。

「あんたらに関係ないでしょ。あたしと本橋の問題ってか、本橋の問題だろ？」

ブス女2「いやだやめてよ、そういう言い方」

ブス女3「そうだよ」

もう、なんで増えんだよ。ブタ川が今絡んできたんだろ、2と3は黙ってるや。

「あのさ、今最初にブタ川がいちゃもんつけてきたんでしょ、2と3はとりあえず引っ込んでくれる？」

「ちょっとお、2と3って何？どういう意味？」

「登場順。あんた木村だよ、木村は2、あおり係。3は…合いの手係ね」

「ひどくない？そういう言い方」

丁寧に説明してやったのに何がひどいってんださっさと下がれブス。

「わかった。美久とひなちゃんは口出ししないで。あとさ、ブタ川っていうのやめてくれる。私、牟田川(むたがわ)なんだけど」

「ああ、ごめん。ムタ川だったわ。あんま使わない漢字だからさ覚えにくくて、ブタ川って覚えてたんだわ」

「二度と間違えないで」

ブタ川は鼻の穴を膨らませて鼻息がちょっと荒くなっててイノシシみたいだった。

「言っとくけど別に動物のブタにかけてブタ川って言ったわけじゃないかんね」

「やめて！」

ざわつき始めた。離れたところから男児の声が聞こえてきた。

「確かに、牟田川、ブタっぽいよな」

「ブツヒ～。フゴフゴ」

ブタ川はベそり始めた。

「ムタ川、あたしの態度が気に食わないならさ、ついでに聞いてきてよ本橋に。なんであたしをガン見してんのかさあ」

ムタ川は今やすっかりただのメスブタになっていた。なんでこんなキモいクソみたいな男好きなんだムタ川は。この歳にしてもう金目当てか。あたしにゃ、さっぱり理解できんバカとブスの考えることは。

「あのね、大悟くん、森さんに聞いてって頼まれたから聞くんだけどね、どうして森さんのこと見てるの？」

ムタ川は顔を真っ赤にして立ち、本橋に媚を売るような目を向けていた。ウオエーッ。お前も、キモい。盛り始めたどブスめが。お前みたいなやつくそまみれのブタ小屋から一步も出てくんな、環境のためだ。ああ、腹が立つ。物言わぬ圧をかける本橋もムカつくし、群れをなしてずかずかとあたしの領域に入って来てただただ目障り耳障りなクソメスもまじ勘弁だ。窓の外では、なかよし学級の子たちが花壇作りしてる。いいな、あいつら。毎日すげえ楽しそうだ。くそ中原のなんの冒険も挑戦もない授業よりはましだろうな。あたしもあいつらに交じって稲作とかやりてえよ。

「なんだよ、ブタ川、いてえな」

「ブタじゃない、私」

ムタ川はヒステリックな声になって泣きながらバカ男児ともみ合いになっていた。あたしはそんなことどうでもいいし、うるせえなって思いながら外見てた。本橋があたしに紙を渡してすぐに去った。

「僕と森さんだけだね、バカじゃないのは」

紙にはそんなことが書かれていた。

「ああー？なんだと？てめえみてえなバカと一緒にすんな、ボケ本橋」

あたしは思わず本橋の後ろから頭突きをかましていた。クラス中悲鳴やら罵声やら鳴き声が飛び交っていてざまあ、めっちゃめっちゃになっちまえて思った。あー、何だよ、すんげえいてえ頭…。

頭ががんがんしながら目え覚ました。鼻には何か突っ込まれてっし、なんだっけか頭の焦点が合わない感覚があった。

「森さーん、大丈夫？分かる？」

「あ、はい」

「お母さんに連絡したから、もう来ると思うよ」

「は？」

「本橋くんが森さん背負って保健室連れて来てくれたんだよ。いいところあるよね、彼」
何？なんだと？本橋ごときが？くそ！なんであたしだけ負傷してんだよ。ふざけんな。

「じゃあ、本橋は無傷？」

「うん、やっぱ男の子だよ。でもよかったじゃない」

全然よくねーや、クソ。バカにしやがって。

「チッ」

「お、舌打ち。気に入らない」

あたしは黙って首を縦におろした。まだ頭がいてえ。ああ、気に入らねえやな。クソ！戸をノックして開く音がした。中原がうちのあの人を連れてやってきた。

「どうもすみませんご迷惑おかけして」

「いえいえ、私は全然。中原先生からお聞きになりました？いきさつといたしますか…」

「はい、本当にお恥ずかしい。もう。女の子だっていうのに、すみません。お相手の子は、大丈夫なんですか？」

「ええ、もう全然。彩子ちゃんの方を心配してあげて下さい。本橋くんの方は授業受けていますよね、中原先生」

「本橋くんは、もういつも通りですよ。非常に落ち着いています。元々とても賢いお子さんでトラブル起こすタイプではないので…」

お前はなんにも分かつちやいなあ、中原。そういう抑圧されたやつがいつか番やつかいなんだよ。だけど教えてやんねー。自分で気付けや！

「本当に申し訳ございません。家でもよーく言って聞かせますので、どうか…」

「こちらとしても、事を荒立てたくないの、まあ、お子さん同士のことですしね」

でたよ、事なかれ。クソ、死んでしまえ。まじ気に食わねえ。無言の不快感はスルーで頭で頭ぶんぐるだけのことが責められるとか、意味分かんね。全然、納得いかねーし。まじまたムカついてきた。クソ。許せねえ。あいつが同じこと誰かにやられてるとか、あたしには関係ねえし。てめえのことは、てめえで処理しろってんだよ、クソクソ、クソ！

うちのおバカさんは、うさんくさいタイトルの本を買って読んであをよりバカにする手段を考えていたのは知っていた。この人にとって、子供はバカで従順な方が楽だからだろう。言うことを聞かないイコールお母さんのことが嫌いっていちいちへこむのがうざい。生きることは自分を尊重することだとなぜ気付かない。あをにとってあのバカどもと同化するための努力なんて無益なんだよ。あをに死ねって言うのか？それとも殺してでも同化しろってか？クソ。どんなに同情を誘っても、あをはあなの言いなりにはならないよ。あらゆることに抵抗するために智慧もつける。誰かに無理やり押し込まれるよりずっと身につくってあをは知っている。義務だからと、毎日毎日学校へ行かねばならない日々は苦行、罰としか考えられなかった。物心ついたときからあをはずっと怒っている。大きくなればバカどもも成長するんだろうしずっとバカばかりなわけないだろうと思っていた。だけどそれはとんだ思い違いだった。

来年から中学ってときだった。

「彩子、秋穂くんって覚えてる？最後の幼稚園の時に一緒だった」

「ああ、アキホ？あのすげーバカなやつでしょ。あをはあいつを超えるバカに未だ出会ってないね」

「亡くなったんですって」

こういうところに、この人の悪意を感じる。本人はそのことに全く気が付いていないところが本当にたちが悪い。アキホはちっちゃいときから持病があったとそのときはじめて聞いた。すげーバカだけどあいつは友達にしてやってもいいと思っていた。あをが引越してからきったね一字で手紙が何度か届いたけどあをは一度も返事を出さなかった。死ぬなんて思ってねーし。あの日のクソ暑さがよみがえり、臭い犬とへらへら笑うアキホの顔が浮かんた。あいついっつも楽しそうだったな。何がそんなにおもしろいんだかさっぱり分かんなかったけど、あいつにとってこの世は、なにもかもおもしろくて仕方ないところだったんだろうなと思った。なんであいつ死んじゃったんだろう。あいつは死ななくても別によかったのに。もっとクソみたいな死んでもいいやつ他にいっぱいいるのに、なんでなんだろう。

「ねえ、アキホはなんで死んだんだろう」

「さみしいねえ、サイちゃん。秋穂くんは、治るのがすごく難しい病気だったんだって。高学年になってからはほとんど学校にも行けなかったみたい。でもね、お医者さんが言っていたより長く生きたんだってよ。お墓参りには遠くて行けないから心の中でさようなら、お友達になってくれてありがとうって言うんだよ」

あをが聞きたいことはそんなことじゃねえんだよ。まじうぜえ、心の中でさよならとか、意味ねえし。もう全然納得いかねえ。なんでアキホみたいになんでも楽しくって、みんなすごいねって本当に思っているようなやつが早く死んで、あをみたい毎日なにもかも気に入らなくて、こんなとこまじクソつまんねえ、バカばっかだっと思ってるやつが生きてんだよってはなしだ。この世は戒めだ。

それからしばらくしてからあたしはメシがあんまり食えなくなった。別にアキホが死んでショックだったとかじゃあない。そんなセンチメンタルなもんじゃねえ。無気力に程近い。いろんなことにあんまり腹が立たなくなった。体に栄養与えっからムカついたり、すげーイラついたりするんだと思って極力食わないことにした。よしよし、いいぞ、いい調子だ、このままいけて思ってたらある朝突然、力づくで病院に連れて行かれた。あの人は昔からあたしを病院に連れて行きたがっていたことは知っていた。何かの病気にしたがっていた。今もそうだろう。ケツ。絶好のチャンスを与えちゃった。クソ。あたしは不意に本で見たロボトミーのことを思い出した。やべえ、こんなところでこうしてはいられない。バカにされる。逃げろ。クソ。腹が減ってふらふらするぜ。こんなじゃ簡単に捕まっちゃう。クソ、クソ！どこにも力が入んねえ。あたしは病気じゃねえんだよ。

「あのさあ、あたし帰る。あなた診てもらったら、なんならさ」

「サイちゃん、待ちなさい。順番もうすぐだから、ね」

あたしの力が弱っているせいなのかこの人の抑える力を強く感じた。

「すげー腹減ったし」

「すごくお腹が空いた、でしょ」

全く、言い方なんてどうでもいいだろうが。

「森さん、森彩子さん第一診察室にお入り下さい」

もたもたしてっから、呼ばれちゃったよ。あーあ、せつかく無駄金使わないで帰ってやろうと思ってたのに、本当におバカさんだねえ。うれしそうにあたしの後をついて来ようとしたので、

「いいよ一人で」

と追っ払った。

「本当に一人で大丈夫？」

くどい。

診察室に入ると、目も合わさずタメ口で質問を浴びせる医者にお腹が立った。

「さんざん待たせれて、この扱いかよ」

一瞬顔をこちらに向けて感情もなんも失くしましたみたいな声でまた紙を見た。

「あなただけじゃないの。皆さんね待っているんだよ」

クソ。こいつ謝んねえし。タメ口だし。なめてやがる。すんげえ事務的。大丈夫か？こいつ。

「で、どんな感じなの？」

超適当だし。お前がお仲間診てもらってこいや。

「最近食欲がなくて、心配性の母に、ここへ連れて来られたんですが、今すごい腹が減ってるので、もう大丈夫です」

「あっそうなの、よく説明できたねえ」

クソ野郎。まじムカつくぶっ殺す。

クソ医者は看護師に向って言った。

「ちょっとこの子のお母さん呼んで」

「いえ、結構です。話なら私にして下さい」

なんだよこいつ。シカトこいてんじゃねえや、ボケ。けっこうだ、って言ってんだろうが、聞こえねえのか？ああ？

「だめだなこいつ」

あの人は低姿勢で入って来て、入れちがいにあたしは看護師に連れられて体重だ血圧だ測られた。あと、血も採られた。あたしを徹底的に弱らせるって作戦だな、クソ医者。なんか気持ち悪くなってきたけど、ここで倒れたりしたらこいつらの思うツボだ。なにされるかわかったもんじやないぜ。あたしは必死で頭を支えた。すると看護師がベッドに寝ろと言って、あたしは点滴をぶっ刺された。やべえ、なんか眠くなってきたけど、寝たらヤバい…なにされるかわかったもんじやねえ…。白目剥きながら眠気と闘ってたら、

「彩子ちゃん、眠っていいんだよ。終わったら起してあげるから」

と巨乳で美人の看護師さんが言った。お、分かってんなこいつと思いつつあたしはなんか気持ちよくて、へらへらしながら眠ってしまった。そんであたしは美人看護師に起こされる前に目を覚ました。頭すんげえスッキリ。点滴って気持ちいい。腕の針はいつの間にか抜かれていた。なんだあれは幻だったのかとか思いながらベッドの前に引かれていたカーテンを開けて、

「もう帰りたいんですけど」

と言うと、あの人が入って来た。早く帰りてえのに、帰りは帰りで金払うのに待たされるし、ホント意味分かんね。なんで誰も文句言わねんだよ。やつら変わんないぜ何も言わなきゃ。ま、言っても変わんねえかもだけどな。

「ねえ、帰っちゃおうよ。こんだけいたら一人くらい帰っても全く誰も気付かないっしょ」

あの人はあきれ顔でため息を吐いた。

「そんなことしたら泥棒と一緒にだよ。彩子は泥棒になってもいいの？」

正確にはあたしじゃなくて、あんたが、な。泥棒の娘か…。あのばあさんのバッグ持ってきちゃいな、とか言われんのかあ。いやだな、人のもんかっばらうのは好きじゃないあたし。まあでも、くれるっていうなら貰うけど。

「聞いているの？彩子」

「ああ。ま、どうしてもあげるよって先方が言うなら貰ってやってもいいけど」

「え？何？なんの話？彩子お母さんの話ちゃんと聞いてた？」

「ちゃんとは聞いてない。いらねえしそういうの」

まじで、ちゃんとかきちんとして聞くとすげ一締め上げられるみたいで言った奴ぶっとぼしたくなる。なんでこんなクソな言葉、年中流行してんだよ、信じらんね。

「サイちゃん今日は学校お休みしようね」

「ああ、いいよ」

やりい。永久に休みでいい。

「あのね、サイちゃん、お家帰ってから話そうと思ってたんだけどね…」

「じゃ、うち帰ってからでいいよ」

「そうお？」

「ま、今暇だし聞いてやってもいいけど。手短に頼むよ」

「…うん」

調子狂うわ、まじで。この人の体内時計どうなってんだろ。早くいやーいいのに。どーせ、いいことじゃねえな、この顔は。…まさか。あたし入院しなきゃいけないとか？それとも、アキホみたいに死ぬのかあたし。…なんだよ、クソ。まだ楽しいことなんもねえのに。いろいろくそつまんなかったぜ、あたし生まれてきて、なんだったんだろうな、とか思いながら死ぬのか？つまんねえ。まじ、つまんねえ。あー、くっそー。

「サイちゃん？」

「入院？死ぬの？どっち？」

「え？」

おっせえわ、まじ、頭。

「だから、あたし入院すんのかアキホみたいに死ぬのかって聞いてんの」

「サイちゃん…」

うわ。やべえ、しくじった。うるつときてるし。まじ引く。ちがうよ、ちがうちがう。まだ悲しみが癒えてないのねかわいそうに、繊細な子なのね、サイちゃんは。とか思ってたろどうせ。ちがうよ。ちやうちやーう。

「もういいわ。うち帰ったらゆっくり聞いてやっからさ、めそるのやめようぜ、うざいから」
そんでま、一時間くらい待たされて、もう昼ってなんなんだよ、病院って。家に帰って、さっきの病院での話をすると、あの人はカウンセリングというやつを受けてみないかと言い出した。あのいけすかない医者になんか吹き込まれたか、と思ったねあたしは。よく分かんないけど、うさんくさい金儲けの臭いがするからあたしはいいと断った。あの人は誰かに話を聞いてもらいたくてうずうずしているみたいだったから、好きにすればと言ってやった。金払って人に話聞いてもらうとか意味不明だわ、バカの考えることは。ついていけねえ。

成績がいいからって私立中受験進められたけど、面接の練習とかありえねえし、公立に行くことにした。親どもは女子中高、んで系列の大学までって線を狙ってたみたいだけど、まじ無理だわそんな。大学とか行ってもしよーがねーし、高校も行く意味あんのかって思う。中学出たら高校と大学に行く分の金だけ貰ってとんずらしようかと思っている。ここにいるからつまんねんかって思いたいし、あたしの知らないすげーおもしろい世界があるって微かな希望もまだ捨てちゃいない。あたしはなんでこんなくそつまんねえバカばかりの環境に生まれて来たのか、そのことがとにかく知りたいんだ。笑っていても騒いでいてもあたしの中のどっかはすげー冷えきってて、虚しいんだ。

中学に入ると、締めつけはますますきつくなった。くっだらねえ上下関係、校則、教師、密告者点数稼ぎ野郎陰険な女大中小などなど、気に食わないことだらけだ。ババア教師と男尊女卑くそじじいには最初から嫌われていた。個人的感情丸出しの無能バカどもだこいつら。頭がっちがちの救いようのない型落ちだ。教室ではブスバカ女とその付属品どもが、こそこそきやあきやあ言って喜んでやがる。あたしは実験をしてみた。バカどもに合わせてほんの少し怒りを抑える実験だ。そしたら、ものすげー気持ち悪い感情が出てきた。これが自責とか反省ってことなのかと思った。いらねー。こんなくそきんもちわりいの、いらねーよ。部活っていうところは、それをバカみたいにみんなに強要するもんだから、笑うしかねえやって感じだった。競技会の後の反省会、出てみたら、自己いましめ大会がおっぱじまって、まじもう、これなんのプレイだよって思ったわ。反省でもねえし。気合いが足りなかった、甘かったとかすげー考えて出た答えがそれか、と。ぜってー一本当はそんなふうにしてねえんだろなと確信していた。困ったときの精神論だな。まあ一位じゃなかったけどそれが現状だからね、それだけのことです。とか言ったら、まあまあ、袋だたきだかんね。ひと通りバカの自己罵り最後まで聞いてから、もう、こういうのやめませんか？って提案した。部室はしんとなって、まずは雑魚キャラから「なんなのそれ一年のくせに生意気」

とかいうお決まりのセリフが発せられた。あたしが何年だろうが、提案内容について考えようぜってやつは一人もいなかった。同じ一年で一緒に練習してた都実ちゃんは下を向いて私は関係ないですって顔をしていた。くそ。やりっぱなしじゃ成長しない、反省なくして進化はないとか、もっともらしいご回答をならべ、あたしの意見をちょっとでも考えてみようってやつは結局一人も出て来なかった。くそ。終わってるよ、バカども。つかえねえやつばっか。お前ら本当はこんな会いやでいやでたまんねえんだろ？反省会のネタ考えながら大会出てるやつとかいるぜ普通に。下手したらネタのためにわざとなんかやらかしたりな。バカじゃねえの？仮病使ってるやつもいるし。意味ねー、反省会とか。まじいらね。大衆の前で恥を多くさらしたもん勝ちの精神マゾ的スポーツか？外からも締め付けられて、自分でも締め付けるとかねえし。刷り込め！国民総マゾビズムとか教育カリキュラムに入ってんのかよって思うわ。気持ちわりいし。喜べるやつは勝手にやってりゃいいけどそうじゃねー奴どうなんだよ。バーカバカバカまじお前らバカばっか。マゾどもの、自己縛り大会はおさまりをつけるために、反省しなかった罰としてあたしが部室の後片付けそうじを一人でやるってことで締めくくられたみたいだ。

気付いたら誰もいなくなっていた。黒板には反省会の文字。ムカついて、チョークを黒板にガンガン投げていとも簡単に折れた。余計に腹が立って、もう投げるもんもないから、自分の右手をどんどん叩きつけた。なんなんだよ、これは。あたしは絶対間違っていない。誰になんて言われても、反省なんてまじいらねえんだよ。バーカ。くそムカツク、マゾの群れ、焚き火にもなんねえ、役立たず。ガラガラっと戸が開く音がして、入り口の方を睨んだ。

「森、手伝うよ」

3年の800Mの男だ。なんだこいつ、あたしに気があんのか？

「いえ、結構です。一人でやるように指図されましたから」

「まあまあ、そんなにとがるなって。…実はオレも反省会とか嫌でしょうがないんだよね」
な・ん・だ・と？

「あ？」

「だから、さっき、なんかおまえ、吊るしあげみたいになってたけど、オレは森派だよ、ここだけの話」

ふ・ぎ・け・ん・な。この、くそちんぽ野郎。あたしはお前みたいなやつが一番腹立つんだよ！
うせろ、このゲス野郎が。

「だったら、さっき言えばよかったじゃないすか」

「そ、それは…」

言えねえわな、てめえみたいな小心野郎に。

「あんたみたいな人がいちばんタチが悪いんですよ。チツ。どっか行ってくれよもう」

「おい、お前今なんて言った？先輩にむかってなんて言ったんだよ、え？」

「うせろっていいました」

こずいてくんなや、もう。あーなんであたしは女なんだ。腕力じゃいくらこのへボ野郎でもかなわねんだよな。それくらい分かるわ。

「どうもすみませんでした」

「てんめーえ、うーーわあーーー」

あー、あおちったよ。くらったわ。こいつけんかの仕方知らねえし、どこ殴ってんだよ、まじで。すげーいてえし。しかも逃げた。だっせー。レイプとかされなくてまじよかったよ。あんなヘツポコ野郎の子供とか全然愛せないし。ってか産まねえし。あーあ、女ってすげえ損だわ。腕打撲しながらあたしは最後まで片づけてそうじしたよ。なんか疲れたわ。

女で得をすることってなんだろうかって考えたんだよね。そしたら、あるものがやって来た。スカウト。ああ、まあね、それはそうかもしれないねと思った。別に有名になるとかチャホヤされることに興味ないけど、中学生で金を稼げるのは魅力だった。お母さんと一緒に今度話を聞きに来てって言われた。調べたら、一応実在する事務所だった。本当は一人で行きたいけれど、まだ相手は信用ならないからな。変態向け美少女ロリコンAVにむりやり出演とかまじへこむし。とりあえず大人が誰でもいいから一緒なら大丈夫っしょそこはと思った。へたしたら母子共演とかになりかねないくらいバカだけどねあの人。で、話したら、

「ダメ、ぜったい」

とか覚せい剤の標語みたいなこと言われてさ、ああ、どうすっかなって思った。この人は何を怖がっているのかと考えた。

「何がダメなの？場所？」

「やめときなさいって」

「なんで？」

「なんでも」

「そういうの、ずるいよ。説明してよ納得できるように」

説明なんてできねーだろうなと思いつつ聞いた。

「お母さん、芸能界とか反対」

「だから、あなたは芸能界の何を知っているの？」

「知らない」

「知らないのになんで反対すんの？」

「そんな汚いところに彩子を入れられない」

あー、だめだこりゃ。固定観念。先入観。これをぶっ壊すのはまあまあまあまあ、大変なこった。気が遠くなるわ。あたしは賢くならないとどんどん侵食されていく恐怖を感じた。あれらは巧みに入り込んで来ようとすっからな。あらゆるものをくもらせるためにな。ある意味陰謀だわこれ。DNAレベルの。締め付けて縛らせて小さくする。それで本質を分からなくさせる。一体誰が得してんだろうな、クソ。それ利用して得してる奴がいんだよ絶対。

「サイちゃん、やめてねそんなところに行くの」

「うるさい」

なんでどいつもこいつも締め付けんだよ、くそ、バカ野郎。ああ、疲れる。くそつまんねえ、もう、なにかにもくそつまんねえ、どうにもなんねえ。こんなの死ぬまで続くなんてうんざりだ。うんざり！

あたしはこのまま黙って引き下がるなんてことできるはずもなく、賞金稼ぎを考え始めた。あの人の財布から金を抜いては、モデル、コンテスト、オーディション片っぱしから書類を送った。当然だけど書類は簡単に通る。面接の途中でたいがいバカさ加減に我慢ならなくなって帰って来るもんだから、まあ、金は稼げねえわな。オーディション会場はいつも気ちがいみたいなバカの熱気で満たされていた。とんだ勘違いブスとか紛れ込んでんだけど、こういうやつが優勝したり受かったりしてんだよな、全く理解できねえ、この基準。さっぱり分かんねえ。あたしの方がよっぽど頭回るし顔もスタイルも整ってるのになんなんだ？笑わねえからか？言葉づかいか？夏休み中にあるオーディションの、面接やってるおっさんに、なにか質問はって聞かれたときに聞いたんだ。なんであたしは受かんないのかって。

「だって楽しくないでしょ」

そう言われた。なんでか分かんないけど、あたしは傷ついたようだ。なにが、どう、とは言えないけど。家に帰って来て部屋に閉じこもって寝た。翌日、高熱を出してどうにも起き上がることができなかった。あたしは何と闘ってるんだ、くそ。負けた気がして悔しかった。頭はもうろうとして体はいうこときかない。クソだ、あたしの虚弱な体。

あたしは楽しいって言葉に思いっきり引っかかってて、事あるごとに、

「だって楽しくないでしょ」

って言葉を思い出してはそのたびにムカついて物に当たりちらした。楽しくないやいけねえのかよ。なんだよ、楽しいって。全然分かんねえし。毎日毎日、ハードル蹴り飛ばしながら走った。ムカつく。ただ走った。クソ。なんなんだよ、楽しいって。今やあたしと一緒に練習するやつは一人もいなくて、せいせいする。うそ。さみしくて堪らなかった。あたしにはなんで友だちがない。なんであたしの周りにはバカしかいないんだ。くそ。あたしはなんでバカでブスに生まれてこなかったんだ。たまんねえ、もう。あたしは最高だけど、最低だ。中身が最低だ。感覚が、思考が湧きあがる感情が最低最悪だ。このイライラ。歯ぎしりで、歯を砕いてしまいそうなこの怒りをどこへぶつければいいんだ。誰かそれを教えてくれ。

しばらくうなされる日が続いた。夢を見るんだ。あたしは薄暗くて不潔で古いじめじめしたアパートに一人で暮らしていて、ある日そのアパートに帰ってくると暗闇の中に死体が横たわっていて、その死体は腐臭を放ち始めている。あたしは誰かと一緒にいて、これ邪魔だからバラバラに切っちゃおうぜって言っている。あたしは思った。あたしがやったんじゃないし一緒にいる奴でもない。けどこのままにしていたらあたしが疑われる。死んでしまったら体なんてただの肉の塊だからいっか。そう思って目が覚める。何をやらかしたか知らないがどっかの国で刑務所暮らししてるのもあった。子供をバスタブにつけて息の根を止めていたりもした。朝起きると体中が人殺しになっているんだ。我慢できずに思いきり叫んだ。誰かあたしを殺してくれ。もちろんこれ以上苦しめない方法で。

中学二年になって新入生が入ってくるとあたしはきゃあきゃあ言われるようになった。不満だらけで心は荒んでいたけれど、見た目だけは美しかった。くそつまねえ。一人陸上部のやつであたしによく話しかけてくる一年生がいた。舞という名で、100Mと200Mを走ってて、一緒に練習することもあった。話しをしていると、こいつもバカに違いはないけどまだ軽度だと感じられたので、練習の合間に聞いてみた。

「なあ、楽しいって何？」

舞はぼかんとアホ面をしていた。

「楽しい、ですか？そんなこと考えたことないです」

「じゃあ、今考えてみてよ」

「は、はい」

「わかったら教えて」

「はい、分かりました」

舞は三年に呼ばれて、筋トレを始めていた。あたしは軽くグラウンドを走っていた。あいつ分かってんのかな。てかこのグラウンドにいるやつらはみんな分かってんだろうか？練習が終わって解散すると舞があたしのところへやって来た。

「先輩、明日まで考えてきます。お疲れ様でした」

そう言って走り去った。あたしは聞く相手をミスったかと思った。もしかしたら、もっとすっげーぶっちぎりバカなやつじゃないと分かんねえんじゃねえの？

翌日、教室でクラスメートのバカどもを観察した。バカどもは休み時間のたびに塊をいくつか作っていったい何の話をしているのだろうか？あれがババアになると道を塞いで話をするやつらになるのか？男児は体を使ってじゃれあってる。あいつらは猿だ。動物園で猿見てんのも同じ感覚になる。しゃべらないだけ猿のがました。おっといけねえ、あたしとしたことが目的を忘れそうになっていた。昼休みに舞が廊下であたしを待っているのを見て、それを思い出した。

「先輩おはようございます」

「森さん、こんにちは、ね」

「で、でも…」

「先輩とか、すげえ気持ち悪いからせめて森さんにして。それが嫌なら話しかけないで、あたしに」

「わ、分かりました。それでなんですけど、私なりに考えてみました、楽しい、について」

「おうおう、で、どうなん？」

「テンションが上がってお腹の中が笑っぱなしみたいな感じです！」

「へー。それってどんなときそうなんの？あんたは、なったことあんの？」

「はい。今もそうですし…あと、好きな男子のこと考えるときとか見ているときとか」

「へー。あんたいんの？そんなやつ」

「いますよ、好きな人くらい」

「ほー」

好きな男児か。あたしはサル山を思い浮かべて片口笑いをした。

「あーいるんですねいるんですね、どんな人なんですか教えて下さいよ。もてるからいいなー」

「うっせーな、いねえよ好きなやつなんか」

よし、まずはデータ1取得完了。どんどん行くぜこうなったら。あたしの後ろの席のデブでひがみっぽい上にプライドが高い女に声をかけた。

「あのさ、あんたにとって楽しいって何？」

「は？あんた？あんたって言われたんだけど、ひどくない？」

と横にいた出っ歯茎ねずみ声女に同意を求めていた。しょうがねえだろ、名前知らねえんだから。デブって呼んでんだよあたしはいつもあんたを。それよりはましだろう？

「めんどくせ。ああ、もういいや、忘れて」

「なにそれ。森さんて怖いし、変だよ。一人も友達いないとかありえないし…」

こそこそ言っただけ、聞こえてんだよ、ボケ。おめえらみんなバカでくだらねえからだよ、ああー気分わりい。

「うっせんだよ、デブ」

教室中が一瞬静まり、すぐにざわついた。男児はニヤニヤしながらこっちを見ている。女からは冷ややかな視線を浴びる。なんだよ、お前ら、本当は思ってたろこいつのことデブって。事実を述べて何が悪いんだ、このクソども。デブは贅肉をたぶたぶ言わせながら顔を覆って教室を出て行った。そうだ、走れ、動けデブ。その無駄な肉がお前を卑屈にさせているんだよ。気付けやバカ。ねずみ声女はねずみ声を出しながら、あたしに何か言いつつ、デブを慰めつつデブを追いかけた。部屋中にいやな空気が充満していた。言いたいことが言えないやつらめ。窓を開けてあたしは外の空気を吸った。始業の音が鳴った。デブは戻って来ずねずみ女だけが戻って来た。

「あんたのせいで、香奈、保健室にいるんだからね」

あっそう。栄養バランスと運動について聞くといいよ、一応専門だろうからそういうの。って言おうと思ったけど、めんどくせえからやめた。聞かれたら言うけど。

「なんとか言いなさいよ」

あーあ、聞いちゃうんだ、こいつは。あたしはさっき思ったままをそのまま言った。

「最低。信じられないそんなひどいこと言うの」

ドアが開いて数学教師が入って来た。ひどいことって言っている時点であいつをデブって認めてることだろ、この、偽善野郎。うそばっかついてっから歯ぐきばっか成長すんだバーカ。起立、礼。着席。この教師もま、なんかあったのは感じたみたいだけど自分の担当クラスじゃないし、授業計画通りに進めないとね、ってのがみえみえだ。あたしにとっては、くっだらねえ自慢話とか聞かされるよりよっぽどいいわ。別におまえらの話が聞けるのがうれしいわけじゃなくて授業が嫌なだけなのよ、このバカどもは。

あたしはこの、うっせんだよデブ発言によって村八分から腹一杯へと昇格した。表向きは。だがまあやっぱりここにも陸上部の800Mクソ野郎みたいなヤツが存在するに違いないとあたしはにらんだ。で、たぶんその最初に口を滑らすのがぶっちぎりバカなんだろう。デブでバカをつるとか意味ねーと思ったけどちょっとした暇つぶしくらいにはなるだろう。ちょうどこの頃またスカウトに会った。あ、そういやあ賞金稼ぎできなかつたな、クソ。なんかあのオーディションの雰囲気とか審査員のえらそうで人を見下した態度とか思い出したらすんげー、腹立ってきた。

「あのさあ、仕事、やったら楽しいって何か分かる？」

「どうだろう。それは分からないけど、やる価値はあると思うわよ。楽しいっていろいろあるってことは、分かるんじゃないかしら。お名前なんておっしゃるの？私は、上村阿津子」

上村さんはあたしに名刺を差し出した。社長だこの人。

「森彩子です」

「仕事するかどうかは別としても、なにか聞きたいこととかあったら電話下さい。私あなたみたいな人、好きよ」

「そりゃ、どうも」

「あ、彩子さん、あなた絵とか歌とかやってみるといいと思うわよ。それじゃあね」

「…そう、す、か。さよなら」

この女の人はテレビと食いもん和别人の家庭の話ばっかしてるくだらねえババアとは違うな、と感じた。あの人レズビアンかな？お金あげるから言うこと（性的に）聞きなさいとか言われたらどうすっかな。ちょっと想像してみたけど汚ねえおっさんよりはましかと思った。

ほとんど毎日、ときには日に二度電話をしてはいろんなことをしゃべりまくった。この人はまともに話ができる。はじめてそういう人に出会った。あたしは上村阿津子さんに恋に似た感情を持ってしまったようだ。クラスの中のぶっちぎりバカ探しのことなど、もうすっかり頭の片隅にもなくなっていた。阿津子さんは、なんとかの映画を見て感想を聞かせてだとか、読んだ本を教えろだとかいうことがあった。映画館に連れて行ってくれることもあったし本を買ってくれることもあった。彼女と一緒にいるとくそつまねえこととか忘れられたから、言う通りにした。キスもした。セックスみたいなこともした。あるとき阿津子さんはあたしにこんな要求をした。

「くだらないと思うかもしれないけれど、同級生とか上級生の男の子と付き合ってみてちょうだい」

なんだと？って思ってちょっと噛みついたんだけど、要は犯罪以外は何でも経験してみろってことだった。おもしれーじゃねえか、とあたしは思った。さっそく翌日学校でその相手を物色した。同級生を見て、ダメだこいつらは一分たりとも付き合えねえと思って三年の教室がある廊下をふらついた。皆さんこぞってお勉強中でまともに顔を見ることもできなかつた。つか受験しねえ根性あるやついねえのかよって思ってたら向こうから鼻ピ坊主野郎が歩いて来た。もうこいつでいいやって感じで声をかけた。

「あのさ、あんた三年？」

「ああ？」

「あたしと付き合って」

「なんだこのアマ、頭おかしいのか？へへッ」

チッ。しくじった。

「あんだとゴルァ。頭おかしいのはてめえの方だろうがハト野郎」

あたしはこいつに背を向け帰ろうと思った。そしたら後ろから髪を掴まれて、

「口のきき方に気をつけろ。外歩けない顔にされたくはなかったらな」

そう言われた。あたしは不覚にも顔を傷つけられることにびびっていた。クソ、クソ、クソ、なんで怯んだあたし。超だっせえ。もうこうなったら高校生とか大学生でいいやって、街を私服でうろついた。早々にかかってきた。見るからに頭悪そうな男だったけど相手はどうでもよかった。カラオケに行こうと言われて、そんなくそつまねえもんと思ったけど阿津子さんが前に言った、歌とか絵とかやってみるといいわよっていうのを思い出して、この男とカラオケに行った。金も出さなくていいしちょうどいいやと思って知っている歌を入れまくった。まあ、展開は予想してたんだけどやっぱりこの男はあたしに近づいて来て体を触り始めた。経験だ、と言い聞かせ触らせてやった。ホテル行こうかって言われたけどそれは御免だ。一億もらってもこいつとはやれねえと思ったんだ。盛りのついた男のめんどくささも見ておこうと思って少しの間気を持たせた。そろそろブチ切れるなという限界のあたりであたしは逃げた。手ぶらできて正解だった。あーあ、アホくさ。あたしはなにをやってんだ。また腹が立ってきた。家に帰るとうちのバカがアロマオイルをたいて待っていた。うざい。加齢臭には消臭スプレー、思春期のイライラにはアロマオイルというフレーズが思い浮かんで余計にイライラした。

「あたしは生まれたときからイライラしてんだよ」

あの人は、彩子のこんな姿初めて見たわとでも言いたげな顔であたしを見ていた。この人は記憶障害があるのだろうか？もう放っておきます知りませんってな具合になるのが自然な流れと思うんだ。てかその方が楽なのに。

「サイちゃん、産まれたときもかわいかったわよ」

これは誰かにインプットされたな、と思った。

「カウンセリング行ってるでしょ」

そういうと分かりやすく顔色が変わった。

「サイちゃんも行く？」

行かねえよ、そんなくっだらねーところ。…いや、待てよ。これも経験、か？

「…ああ。行ってみっかなあ」

あたしは家を出て阿津子さんの所へいくことを真剣に考え始めた。

連れて行かれたのは、病院とかじゃなくてなんか普通のマンションの一室であたしからしてみればあやしき炸裂だよって感じだった。おバカさんは他にも、何軒か行ってるみたいだった。どんだけ話すことあんだよ。他にもっと実りあることねえのかって思う。金取ってるだけあって気分を害さないように話もっていったのわかんけど、あたしにはまるで役に立たねえし。余計にイライラした。あたしの何が分かるんだふざけんじゃねえや、ボケって感じです。無駄な金を使っちゃった。あたしの金じゃないですけど。経験ってムダ金使ったり、ムダの塊みたいなやつと付き合っただけムダな時間過ごすことなのか？阿津子さんにそれを聞こうって思ったら、あの人どっか行っちゃってたよ。まさかと思ったけどね。電話は通じねえし、事務所は看板もなくなってるし。マンションも引き払ったって管理人が言ってるし。なんなんだ、これは。中学卒業したら家にいらっしやい親御さんうまく説得してあげるから、一緒に暮らそう。楽しいわねきっと。旅行にも連れて行ってあげたいわ。あなたにはまだまだ伝えたいことがいっぱいある。でも私はあなたを縛ったりしない、自由でいてほしい。ずっとあなたの味方よ。彩子が大好きよ。あーあ。阿津子さんに何があったか知らないけど、結局あの人クソだったってことか。あの子の言うこと聞いちゃって、いろんな経験するんだとかはりきってあたし、すげーバカだ。クソだ。死んじまえ。あたしは阿津子さんと暮らすはずだったマンションの屋上に立った。このくそつまねえ世界とおさらばだ。

サイコがやってきた

<http://p.booklog.jp/book/46531>

著者 : Kevin Spring

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kevinspring/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/46531>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/46531>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.